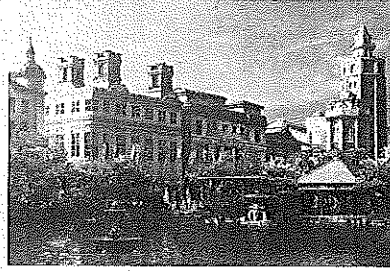


# 1914 幻の東京 ② 撮影からVFXまで 全編 4K制作に挑戦

## 映像にしたい100年前の風景は絵葉書で再現



写真絵葉書をレイアウトベースに当時の建築物を再現した (© NHK)

### NHK / NHKアート

NHKは今年の1月1日総合テレビで放送した「1914 幻の東京」が、今年12月10日放送される「1914 幻の東京」の制作をすべて4Kで行うという前例のない番組制作を行った。この番組はNHKオンデマンドにおいても10月下旬から2K版が配信されており、視聴数も順調に伸びているという。この画期的な取り組みを担ったNHK大型企画開発センターのシニア・ディレクター・貞志謙介氏、撮影機材の漁夫や素材の管理・現像を担当したカドバシ・コミュニケーションの小島英雄氏、VFX制作を担当したNHKアートのデジタルデザイン部CG・VFX担当部長林修彦氏に話を聞いた。

## 基礎作業で完璧に近い台本を作成

この「1914・幻の東京」が、今年12月10日放送される「1914 幻の東京」の企画は、昨年6月に通ることになるが、それ以前「エクス」までの半年間で前例のない番組制作しないといけない。そこで、まず100年前の歴史考証リサーチをし、それからストーリー、台本を作った。絵コンテを作る作業に取りかかると、

「これは本当の基礎作業です。本来であれば、このような作業というものは多少の修正を経て撮影しながら修正してゆきますが、時間的余裕があまり多くはないので、今回は事前にVFXの可能性を試すために、VFXはかりでなく、様々な表現を試すことも必要だ。そこで、番組を構成する映像は、100年前の東京の街と大衆の姿をまがえらせる場面を、歴史考証リサーチを

「VFXを使用し、100年後の現在の日常生活は、ドラマ仕立てにしたほか、100年前に実際に起きた出来事を再現するシーンと、歴史学者や作家、関係者のインタビューやVFXによる表現を組み合わせ、当時の街の風景や資料の活用などVFX制作を構成した。同番組のVFX制作を担当した林氏は、3DCGで作ったものはスケジューリングから、風景をデジタルで再現するところまで、またストーリーを展開する中で、銀座や浅草、東京駅など東京の9カ所の風景を再現する必要があったという。しかし1914年当時の建物というのは、現存するものはほとんどなく、撮りきれない場所が多かったという。そこで、まずは基本的な構成を、VFX制作を構成する映像は、100年前の東京の街と大衆の姿をまがえらせる場面を、歴史考証リサーチを

「今回の番組のために、貴志さんが映像化した風景を絵葉書で採りました。実際にその場所が今でも撮影できるかと言えは、戻って来てほしいという場所が撮影できる場所でした。そういうところもあって、昔の絵葉書を今、現実に撮影できる状況になったというところからスタートしました。このときは私たちがもともとあり、制作期間も限られていたり描く場所が多かったりといった中で、カメラは基本的にF1Xで、絵葉書の影を写したとき、大変思いやうというところからスタートしました。」(林氏)

そして、この番組の主役となる当時の民衆をVFXショットで合成するべく、緑山スタジオのオープンセットで、最大の名のエキストラを使って撮影を行った。

大人数を撮影するので、オープンスタジオには巨大なグリーンパネル(高さ2・7m、長さ50m)が用意された。巨大パネルは、NHKアートのリアルセットの美術スタッフを担当したという。撮影されたのは9月で、時代考証に合った着物を着用していたこともあり、エキストラたちは残暑厳しい炎天下の元での撮影となった。

「浅草六区は当時の繁華街だったので、民衆をたくさん撮影しなければいけません。私は、事前に放送用ではない別のコンテツで4Kを撮影したとき、大変思いやうというところからスタートしました。」(林氏)

また、林氏は撮影の際、絵葉書のアングルを分析して、カメラポジションを割り出した。カメラは両目くらいのものを、使うかも含め、撮影する際にも、絵葉書から遠慮し、撮影ポイントがちゃんと撮れているかを事前にシュミレーションしながら、撮影に臨んでいる。